

博士學位論文

内容の要旨
および
審査結果の要旨

第10号

平成25年度
高野山大学

【はしがき】

本号は、学位規則（昭和28年4月1日文科省令第9号）第8条による公表を目的として、平成25年3月15日に本学において博士の学位を授与した者の論文の内容の要旨および論文の審査結果の要旨を収録したものである。

学位記番号に付した甲は、学位規則第4条第1項（いわゆる課程博士）によるものである。

目 次

| 学位の種類 | 学位記番号 | 氏 名 | 論 文 題 目 |
|---------|--------|----------------------------------|-----------|
| 博士(密教学) | 博甲第13号 | <small>とくしげ ひろし</small> 徳重 弘志 | 『理趣広経』の研究 |

氏名(本籍地) 徳重 弘志 (宮崎県)
学位の種類 博士(密教学)
学位記番号 博甲第13号
学位授与年月日 平成26年3月15日
学位授与の要件 学位規則第4条第1項該当
審査研究科 文学研究科 密教学専攻
学位論文題目 『理趣広経』の研究
(英文タイトル) A Study of the *Śrīparamādyā*

論文審査委員 主査 高野山大学教授 乾 仁 志
副査 東北大学教授 桜 井 宗 信
副査 高野山大学教授 藤 田 光 寛

内 容 の 要 旨

本論文は以下のような二部構成になっている。

第1部 内容研究

第1章 解題

第1節 基礎資料

第1項 サンスクリット本

第2項 漢訳

第3項 チベット語訳

第4項 註釈書

第5項 現代語訳

第2節 構成

- 第1項 先行研究
- 第2項 蔵漢所在対照表
- 第3項 研究史
- 第2章 『理趣経』類本と『真実撰経』における用語の変遷
 - 第1節 四大品の名称の変遷
 - 第1項 はじめに
 - 第2項 先行研究
 - 第3項 『理趣経』初段の重説部分
 - 第4項 『百五十頌般若経』と『真実撰経』の先後関係
 - 第5項 おわりに
 - 第2節 大乘現証
 - 第1項 はじめに
 - 第2項 「大乘現証」が用いられている文献
 - 第3項 『理趣経』における「大乘現証」
 - 第4項 『大日経』における「大乘現証」
 - 第5項 『真実撰経』における「大乘現証」
 - 第6項 漢訳文献における「大乘現証」
 - 第7項 おわりに
 - 第3節 降三世明王の真言の変遷
 - 第1項 はじめに
 - 第2項 真言の変遷
 - 第3項 尊容の変遷
 - 第4項 因縁譚の変遷
 - 第5項 おわりに
- 第3章 『理趣広経』における灌頂の変遷
 - 第1節 阿闍梨の作法
 - 第1項 はじめに
 - 第2項 灌頂の構成
 - 第3項 瓶準備儀軌
 - 第4項 曼荼羅諸尊の召請
 - 第5項 阿闍梨入住
 - 第6項 狭義の灌頂次第
 - 第6項 おわりに
 - 第2節 狭義の灌頂次第
 - 第1項 はじめに
 - 第2項 「狭義の灌頂次第」のテキストと試訳
 - 第3項 水灌頂
 - 第4項 金剛杵灌頂
 - 第5項 名灌頂
 - 第6項 おわりに

第4章 結

第2部 資料研究

第1章 「極喜金剛秘密の供養の廣大儀軌」における灌頂

第1節 はじめに

第2節 校訂および和訳に際して

第3節 和訳

第4節 チベット語訳テキスト1（ツェルパ系統に基づく校訂テキスト）

第5節 チベット語訳テキスト2（ブダク写本の校訂テキスト）

第2章 「弟子印入廣大儀軌のタントラ」における灌頂

第1節 はじめに

第2節 校訂および和訳に際して

第3節 和訳

第4節 チベット語訳テキスト

第1部の内容研究は四章構成である。

第1章は、本論文で取り扱う基礎資料として『理趣経』類本の梵蔵漢にわたる原典や注釈書および現代語訳の書誌データ、また『理趣広経』の構成および先行研究から窺える研究動向と研究成果を整理している。

第2章の第1節では、『真実撰経』の四大品の名称を手がかりにして、重説部分を有する『理趣経』類本と『真実撰経』の先後関係を考察している。『理趣経』初段の重説部分には、『真実撰経』の四大品と共通する用語のあることは夙に知られていた。最近『理趣経』の梵本が新たに発見されたが、そこには重説部分も梵文で書かれていたため、両文献の梵文の比較が可能となった。ここでは、四大品中の一切義成就品と遍調伏品の名称に注目し、両文献で用いられる用語に相違点が見られること、とくに釈尊の幼名でもある一切義成就の梵名で *sarvārthasiddhi* が用いられているのは『真実撰経』とそれに類する文献に限られ、その他の『理趣経』を含む文献では何れも *sarvārthasiddha* が用いられていること、また遍調伏品の梵名で『真実撰経』で用いられる *sakalajagadvinaya* は『真実撰経』以外には用例が確認できないこと、これらの事実から『理趣経』初段の重説部分は、『真実撰経』に先行して成立した可能性の方が高いと結論する。

同第2節では、『真実撰経』における重要語の一つである「大乘現証 *mahāyānābhisamaya*」に注目し、この用語の諸文献における用例を精査している。その結果、この用語は主に『理趣経』および『真実撰経』と関係の深い文献に確認されるという。その中で、この用語の初出はチベット訳『大日経』の付属儀軌である「如来出生曼荼羅加持品」の可能性が高いこと、またこの用語は主に金剛薩埵を象徴して用いられていること、さらにもっとも多くこの用例をもつ『真実撰経』において特に重視された用語であることを指摘する。

同第3節では、降三世明王の真言と尊容の変遷から、『理趣経』類本と『真実撰経』の先後関係を再検討している。降三世明王は最初に『大日経』に登場するが、そこでは大自在天と鄔摩后を踏みつけるという描写はない。このような描写が出現するのは『真実撰経』になってからである。ここでは、まず真言については、『理趣経』第三段のものが『理趣広経』に受け継がれ、そして大幅に増広されて『真実撰経』降三世品の真言に展開したと

予想する。次に尊容に関しては、『理趣経』第三段のものがもっとも簡略で、それに比べてやや詳しい『理趣広経』と『真実撰経』とでは、尊容が類似していることから、両者の先後関係は判断できないとする。しかし、『真実撰経』における降三世明王による大自在天と鄔摩後の降伏譚が、豊富かつ詳細な内容をもことから、『理趣広経』のものよりも発展していると捉える。

第3章は、『理趣広経』における灌頂の変遷を検討したものである。同経において灌頂儀礼が比較的詳しく描かれるのは、般若分Ⅰの初段「大三昧耶の真実金剛と称する大儀軌王」(ŚPA)、真言分Ⅱの初段「極喜金剛秘密の供養の廣大儀軌」(ŚPB)、真言分Ⅲの初段と一組になっている第二段「弟子引入廣大儀軌のタントラ」(ŚPC)と同じく真言分Ⅲの第二十二段「一切如来の吉祥大三昧耶の曼荼羅の甚秘密儀軌」(ŚPD)である。

第3章の第1節では、般若分Ⅰ(ŚPA)と真言分Ⅱ(ŚPB)に説かれる阿闍梨の作法を取り上げ、両者の発展段階を比較し、真言分Ⅱ(ŚPB)の方が般若分Ⅰ(ŚPA)よりも整理・増広されていることを指摘する。なおこれに加えて、本節の中で、チベット語訳諸資料のうち、真言分Ⅱ(ŚPB)におけるプダク写本の読みが他のツェルパ系統やテンパンマ系統の資料とは一部大幅に語順や語句が異なり、それがむしろアーナンダガルバの『吉祥最勝本初広釈』(Ṭika)に見える引用文と一致する事実を新たに確認している。

同第2節では、真言分Ⅲの初段と一組になっている第二段(ŚPC)と第二十二段(ŚPD)を中心にして、水灌頂、金剛杵灌頂、名灌頂といった、いわゆる弟子の入壇灌頂における「狭義の灌頂次第」について比較し、灌頂の発展段階を考察する。その上で『真実撰経』の灌頂儀礼と比較する。その結果、『理趣広経』に関しては、内容が段階を踏んで整理・増広されていることから、般若分Ⅰ(ŚPA)、真言分Ⅱ(ŚPB)、真言分Ⅲ(ŚPC)、真言分Ⅲ(ŚPD)の順で成立したと推定する。また真言分Ⅲ(ŚPD)と『真実撰経』の関係については、真言分Ⅲ(ŚPD)の段階で金剛杵灌頂に金剛禁戒が併修されるようになり、『真実撰経』において金剛杵灌頂から金剛禁戒が分離され、その金剛禁戒に決定要誓真言が追加され、それが『秘密集会曼荼羅儀軌』に継承されたと推定する。

第4章の結びでは、上記に論じた内容を整理し、限られた範囲ではあるが、用語と灌頂の変遷に注目した結果として、改めて『理趣広経』においては、般若分Ⅰ、真言分Ⅱ、真言分Ⅲという順序で成立したこと、また『理趣経』類本と『真実撰経』に関しては、重説部分を含む『理趣経』の略本、『理趣広経』、そして『真実撰経』の順で成立したと推定できると結論づける。

第2部の資料研究は二章構成になっている。

第1章は、真言分Ⅱの「極喜金剛秘密の供養の廣大儀軌」(ŚPB)の中に説かれる「阿闍梨の作法」を構成する瓶準備儀軌・曼荼羅諸尊の召請・阿闍梨入住・弟子引入・投華・狭義の灌頂次第・後方便の箇所に対する和訳とチベット語訳の校訂文を提示している。校訂文は版本と写本の計12種類のテキストを校合した上で、特にツェルパ系統の読みを提示する。また参考資料として他の諸資料に比べて特異な読みを示すプダク写本の校訂文もこれに加えている。

第2章は、真言分Ⅲで灌頂について説く「弟子引入廣大儀軌のタントラ」(ŚPC)と「一切如来の吉祥第三昧耶の曼荼羅の甚秘密儀軌」(ŚPD)のうち、前者の儀軌の和訳とチベット語訳の校訂文を提示している。内容は、儀軌の名称、前行、弟子引入、投華、狭義の

灌頂次第、曼荼羅に入る功德、誓誠、三三昧耶授与、後方便、章題の十段に分けられる。校訂文は版本と写本の計 13 種類のテキストを校合した上で、特にツェルパ系統の読みを提示する。

以上、緒言・凡例・目次・参考文献等を除き、本論文は総頁数 137 頁からなる。このうち、第 1 部が 101 頁、第 2 部が 36 頁である。なお、一頁あたり、日本文で 38 字× 30 行のレイアウトである。

審 査 結 果 の 要 旨

1 審 査 講 評

『理趣広経』は「初会金剛頂経」である『真実撰経』と並ぶインド中期密教を代表する基本聖典の一つである。古来より『金剛頂経』の広本である十八会の中の第六会に相当すると言われ、その重要性については十分に認識されていたが、注釈等が伝来しなかったこともあり、研究そのものは十分に進まなかった。

しかし、明治時代に入り、新たにチベット大蔵経の存在が知られ、その後対応するチベット語訳も明らかになり、次第に注目されるようになった。そのような中で、略本に対応する梵本の発見をきっかけにして、梅尾祥雲氏が『理趣経』類本の梵蔵漢の三資料を比較した総合的な文献研究を進め、その研究成果が公表されるに及んで、内外の研究者から大いに注目されるに至った。とりわけ梅尾氏が投じた『理趣経』類本の成立問題は、その後、松長有慶氏をはじめ、幾多の研究者が論陣を張っていることから、その関心の高さが窺われる。

『理趣広経』も、その後、チベット語訳の研究がさらに進められ、漢訳との比較によって内容構成等も明らかになった。これは酒井真典氏や福田亮成氏の業績に追うところが大きい。また曼荼羅に関する研究では梅尾祥雲氏が先鞭を付け、その後、田中公明氏によって飛躍的に研究が進められたが、最近では川崎一洋氏の研究も見逃せない。さらに灌頂儀礼については、とくに桜井宗信氏による勝れた先駆的成果が注目されている。

そのような中で、『理趣経』の略本とはいえ、重説部も梵文で書かれた梵本が苦米地等流氏によって新たに発見され、かつ校訂出版されたことは、この分野における画期的な研究成果として評価される。

しかし、文献の特色・意義をふくむ『理趣広経』の蔵漢テキストの全容解明は、従来も十全になされてきたとは言い難く、現在もなお斯学の課題として残されていると言った方がよいであろう。その意味で、本論文も論題から推察されるような意味での『理趣広経』の全容解明にまで及んだものではない。本論文は、とりわけ近年問題になっている『理趣経』類本と『真実撰経』の先後関係の確定や、『理趣広経』における灌頂儀礼の変遷過程の解明を中心にして、とくに『理趣広経』の位置づけについて再検討したものである。また併せて、文献研究の基礎手続きとして必要な原典の校訂作業を進め、とくに灌頂儀礼の当該箇所を絞って、チベット語訳テキストと和訳等を公表したものである。

以下に、口述試問と審査員 3 名による協議内容を踏まえて、本論文について論表していきたい。

2 研究方法の特色

この分野での研究としては当然であるが、まず第一にサンスクリット原典を重視し、丹念に調査している点が挙げられる。『理趣経』類本と『真実撰経』の先後関係に関連していえば、新出資料として『理趣経』類本の十一番目に新たに加えられた略本の梵本（苦米地本）に注目することで、『真実撰経』（堀内本）に見られる用語の特色を明らかにしている。その好例が釈尊の成道前の名前にも使用されている一切義成就（sarvārthasiddhi）である。

第二は、上記の特色に関連して、必要に応じて用語の事例を既存の大小乗の諸経典にまで遡って丹念に確認している点である。これは地道な作業で、派手さはないが、文献学の側面としてはきわめて重要な手続きといえる。sarvārthasiddhi に関して言えば、他の大小乗の文献で確認されるのは、『理趣経』に同じく何れも sarvārthasiddha であって、sarvārthasiddhi の例は見られない。

第三は、『理趣広経』に関して、チベット語訳のテキストを用いるに当たっては、可能な限り労を惜しまず多くの写本・版本を収集して校合している点である。このようなチベット語資料を重視する姿勢が、チベット語訳諸資料の中で、『理趣広経』の真言分Ⅱ（ŚPB）におけるブダク写本の読みが、他のツェルパ系統やテンパンマ系統の資料と一部大幅に語順や語句が異なる発見に繋がったといえる。

第四には、以上に述べたことから知られるように、梵蔵漢の一次資料の原典調査を踏まえた上での資料分析を研究方法の基本に置いている点である。これは文献学の基本であるが、研究成果において客観性を優先しようとする姿勢のあることは評価されよう。

3 研究成果

本論文によって明らかにされた新たな研究成果はいくつかあるが、およそ次のような三点に集約することができる。

第一は、『理趣経』類本と『真実撰経』の成立に関する先後関係に関して、『理趣経』が『真実撰経』に先行するという田中公明氏の説に対する傍証を提供することになった点である。わが国では古くから漢訳『理趣広経』は「第六会の金剛頂経」に相当すると考えられてきた。そのため、近年におけるまで、「初会の金剛頂経」である『真実撰経』が不空訳等の『理趣経』略本や『理趣広経』に先だって成立したと考える傾向があった。最初に両者の関係について取り上げた梅尾氏も、『般若理趣分』から『実相般若経』まで発展してきた教義を、『初会金剛頂経』の思想によって純密の立場から整理し広説したのが漢訳『理趣広経』の『七巻理趣経』であり、さらにチベット訳『理趣広経』および『金剛場莊嚴タントラ』等に発展し、それから他の略本が抄出されたと見る。こうした見方に対して、田中氏は、『金剛頂経』は『理趣経』が密教化し『理趣広経』に発展する過程で成立したと、不空訳『理趣経』は『初会金剛頂経』に先行するという説を展開した。これに対しては異義を唱える研究者もいるが、本論文の第Ⅰ部第1章では、結果的に田中氏の主張を傍証することになった。

第二は、灌頂儀礼の内容を検討することによって、『理趣広経』内の成立と増広過程の解明に道筋を付けたことである。チベット訳『理趣広経』は内容的に成立の異なる三つの文献によって構成されている。全体は大きく般若分と真言分に分けられているが、真言分

はさらに「大楽金剛秘密」と「吉祥最勝本初」の二つに分けられる。漢訳はこれに対し、真言分の「大楽金剛秘密」の部分を欠く。田中氏はこれらチベット訳に見られる三つの文献は、それぞれ順に『金剛頂経』十八会の第六会、第七会、第八会に相当し、しかも第六会、第七会、第八会の順に成立したとする説をすでに唱えているが、最近になってさらに『理趣広経』の内容も『真実撰経』に先行して成立したものであることを明らかにした。本論文は田中氏の取り扱わない灌頂儀礼を比較検討したものであるが、結論としては田中氏の説を支持することになった。

第三は、プダク写本のチベット大蔵経にある『理趣広経』の読みが、ツェルパ系統やテンパンマ系統の資料とは一部大幅に語順や語句が異なり、しかもアーナンダガルバの『吉祥最勝本初広釈』(Tika)に見える引用文と一致する事実を新たに確認した点である。近年、チベット語訳のテキスト研究においては、複数の写本と版本の校合が推進されているが、密教経典における異読の問題点を指摘した点は評価される。

4 問題点

上記のような明確な研究成果がある反面、資料取り扱い上の問題点や論述上の問題点もあるので、以下に指摘し、今後の改善を期待したい。

まず第一に指摘したいのは、漢訳資料の取り扱いに関してである。本論文においては、漢訳の例文が各章で引かれているにも拘わらず、それに対する分析が十分になされていないため、漢訳における特色なり問題点の指摘がないのは残念である。国訳を試みるなり、あるいは訓点を付すなりして、チベット訳との比較による違いも確認してほしい。文献研究として梵蔵漢あるいは蔵漢の資料を取り扱っているのであるから、それらの内容比較は研究手続きとして決して欠かすことはできないであろう。

第二には、若干結論ありきの感が否めない。研究成果としては評価できる内容であるが、その論証過程で推論を重ねて蓋然性を高める傾向も感じ取れる。とくに第I部、第2章、第3節の降三世明王の真言と尊容の比較や、同第3章、第2節の狭義の灌頂次第の考察では、『理趣広経』と『真実撰経』の先後関係については、結論ありきで、推論を重ねすぎているように感じられないわけでもない。また同第2章、第二節、「大乘現証」の用例についても、明言しないものの、『大日経』、『理趣経』類本、『真実撰経』の順で用例を検討する背景には、経典成立史に対する著者の考えが前提になっているように思われる。とりわけ、「大乘現証」という語の初出を『大日経』外篇とするが、これも同外篇の成立時期が確定しない限り、軽々には言えないのではないか。

第三には、上記の第二で指摘した降三世明王に関しては、文献のみでの考察にとどまっているが、こうした密教図像に関するものは、一方で遺品との比較も望みたい。

第四には、論説が簡素で丁寧さに欠けるきらいもある。そのため、今ひとつ論拠が不明な場合も少なくない。先行研究の主張や問題点についても、もう少し詳しく丁寧に紹介することで、読む側の理解も得やすくするように努力することも必要ではないか。

第五には、論述の手順として、それぞれ取り扱う箇所の全体像を最初に示して、その上で問題となる部分を取り上げるようにした方がよい。灌頂の記述に関しても、各文献の当該箇所に関する全体像を示さないまま、特定の部分について詳しく論じられても、何が問題なのかスムーズに理解しがたい。

第六に、参考文献については、参考にしたものの他にも、先行研究で関連するものは収集し、必要に応じてコメントを加えることも必要である。参考にしなかったというだけで取り上げないというのでは、先覚者への配慮が足りないし、場合によっては見落としていると見なされることもある。

第七に、今回の成果の一つであるプダク写本の読みであるが、今回取り扱った限られた箇所のみならず、可能ならば『理趣広経』全体に亘って、他のチベット語訳の資料と比較した結果を報告してほしいところである。

第八に、たとえばプトンの『十万タントラ目録』には、瑜伽タントラを紹介して、方便を主に説くものと、般若を主に説くものがあるとし、後者には東北 Nos.487-493 までを取り上げている。本論文では、通常言うところの『理趣経』類本に含まれる Nos.487-490 については言及するものの、こうしたプトン等のチベット文献の取り扱いについての視点が欠如している。こういった点も確認してほしい。

5 審査結果

去る2月4日に口述試問を実施し、主査1名副査2名の計3名によって審査し協議した結果、本論文が博士論文としては、当該文献の取り扱い範囲が思うほど広くはなく、またそれぞれの検討内容の説明が比較的簡素で丁寧さに欠けるといった種々の問題点があるものの、本論文の基軸になっている『理趣経』類本の『真実撰経』との先後関係や、『理趣広経』における灌頂儀礼の変遷過程に関しては、先行研究を補完し、今後の斯学における基準の一つになりうる成果と認められること、またチベット語訳諸資料を丹念に蒐集し、とりわけ従来指摘されてこなかったプダク写本の特異性についての新知見が見られること等を評価し、審査員3名の合意の下、合格と認めた。